

## 書 評

Walter Simons,  
*Cities of Ladies. Beguine Communities  
in the Medieval Low Countries 1200-1565,*

University of Pennsylvania Press, 2001.

上 條 敏 子

この書物は、中世西欧が産んだ先駆的フェミニストのクリスティーヌ・ド・ピザンの同名の著作『女の都』とは何の関係もない。本書で言われている女の都とは現ベルギー、オランダ一帯に13世紀から16世紀までに創建された未婚者、寡婦などの单身女性のための専用居住区たるベギンホフ (Begijnhoven) を指す。そこは修道女としての盛式誓願を立てなかったが、既婚女性一般とも異なる第三の道を選びとり、祈りと労働の生活を送った女性たち (ベギン Begijn と呼ばれる) が作り出した都市内都市の景観をもつ生活空間で、現在も13箇所が世界遺産の指定を受け、独特の雰囲気をつたえてベルギー各地の都市空間を彩っている。このベギンホフとそこに居住した女性たちベギンは近年の女性史隆盛の流れの中で脚光を浴びており、中世の女性を論じた研究書の中で彼女らに触れていない著作はない、と言われるまでになっている。

本邦でも、この著作が出版されるに先立って、国府田武氏の著作、また拙著『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』(2001年 刀水書房) がたて続けに出されており、このテーマは一挙に、身近になったと言ってもよいだろう。ベギンホフとそれを創建し支えた女性たちは、もちろん女性の生活史への関心からのみならず、16世紀の宗教改革に先駆ける中世中期の教会刷新の動向としても、また宗教改革のさなかには、自信を失

いがちであった教会人に、汲めども尽きぬ信仰の泉として力を与えた信徒団体としても興味ある研究対象である。この時期教会——制度としての教会——を支える男性聖職者は、自らの傘下にある敬虔な女性たちに、自らの職務、男としての自分たちに欠けているものを認め彼女らから靈感を得ようとしてさえいた。

著者ウォルター・シモンズは、ベルギー生まれでヘント大学に学んだ後、現在はアメリカに在住する。本書は、英語で読めるベギン関連文献としては1954年のマクドンネルの『中世文化の中のベギン・ベガルド』(Beguines and beghards in Medieval Culture)以来最もまとまった書物として、本邦でも出版前から、呼び声が高かったが、マクドンネルの著作に匹敵するというよりは、ベルギー人による外国人向けに書かれたベギンホフ紹介文献としての魅力が立ちまさっているように私には感じられた。

13世紀当初、北部ヨーロッパにおいて、最も都市人口密度が高く、高い教育水準、都市的産業構造、ゲルマン語系住民と、ワロン語(フランス語方言)系住民の交流の場としての長い歴史を背景に、同地域ではベギン登場以前に、教会改革と異端的水脈が交錯する様相をみせて、俗人男女がキリスト教社会の中でより大きな役割を果たすことを望んでいた。そうした背景からベギン運動をながめると、組織としての教会と人材の失敗を正す運動、あまった富を配分し、弱者を助け、聖書ほかの文献への理解を深める運動として、ベギン運動は立ち現れてくると著者は言う。ことほどさように正統か異端か、といった二項対立的な単純な問題設定に拘泥することなく、時代と地域の伝統を踏まえて、より微妙な色彩をもつ注目すべき動向として、立体的に運動の把握がなされている点は、ベルギー出身者ならではの、と私には思われた。

本書の構成は1、南ネーデルラントにおける女性・労働・宗教、2、ベギンホフの形成、3、観想的生活と活動的生活、4、ベギン共同体の社会的成り立ち、5、抗争と共存、6、結語の全6章と、附表からなる。本文は全体335頁のうち、わずかに143頁と短めで、マクドンネルの600頁を超える大著とは、叙述のスタイルも構成も異なることから、マクドンネルのそれとは相互補完的に参照されることが望ましい。また、きわめて重要な史料であっても、マクドンネルらによって英語圏ではよく知ら

れた史料は、紹介を省略される傾向にあり、前掲拙著とも交互に参照することが望ましいだろう。

ベギンについて書かれた文献の歴史は長いが、歴史的に注目すべき動向として、ベギンの生活のあり方に焦点をあてた研究が書かれるようになってから、まだ日が浅い。この現状に照らしてみる時、シモンスの著作は、個別の論点について興味深い指摘が随所になされており、運動の生成とその基礎となる生活スタイルについて、いまだ明らかになっていない問題がどれほど多いかを教えられる。惜しむらくは、ひとつひとつの指摘が、先行研究とどう切り結ぶのかが明示されないため、初学者には個々の指摘が研究史に対してもつ意味が明らかでない。例えば、ベギン共同体の二つのタイプのうち、低地地方に展開したホフ型ベギンホフの発現は、より広い範囲でみられたコンヴェント型と同時に、もしくは先行しておこったという知見は(36頁51頁)ベギンホフの発現を発展段階的にとらえたフィリップペンや、共同体の類型に特に注意を払わず現象の全体を自発的運動ととらえたマクドンネルの認識とどう切り結ぶのか。いずれにせよ、本書が積み上げた膨大なデータが、ベギン運動の生成と発展に関する暗黙の了解事項に一石を投じるものであることは間違いない。今後この問題に取り組むものにとって必読の書として座右におかれ丹念に読みとかれるべきであろう。

また、特定の文献や近刊書ばかりに偏ることなく、入手困難な古い雑誌に掲載された地味な研究がよく渉猟されている点もフラマン語を母語とした著者ならではの点である。

このように、事例研究については、よく文献を渉猟している一方で、序であげられている研究史上意味のある著作のフォローが、ドイツ語文献のみとなっている事は、ベルギー生まれの研究者による英語文献という本書の性格に照らして不自然に感じられた。とりわけ、ビュッヒャーについては、用語法、註のつけ方などから判断して、実際に参照した上で引用しているとは到底思われない。ビュッヒャーの『中世の女性問題』は、年代が古いこともあり希少本の類に入り、知名度のわりに実際に読まれてはいないのではないかと想像されるが、批判するのであれば、実際に自ら読んだ上で批判するのが、最低限の作法ではないだろうか。

また、紹介される事例の豊富さに反して、考察が管理者としての男性

の視点に偏り、紋切り型で当事者たる女性の視点に立っていない面も見受けられた。73 頁には、ある既婚女性に対してあるベギンから「結婚生活から解放されて平和で心やすらかに暮らせるよう」ベギンホフ内の家屋に対する居住権を遺贈した事例の紹介があって、その理由については、性的関係の破綻が疑われているが、それは男性の側が離婚を望む時の理由というものであろう。女性の側から離婚をのぞむ理由の筆頭といえ、夫の暴力、賭博、悪い酒癖、女癖、甲斐性なしといったところではないか。また「不幸にして妊娠した」ベギンに対して当初は寛容な措置がとられていたとの事例の紹介のあとで、妊娠を許容する規定が後に規約から削除されたのは当然のことと断じられているが、どうなのだろう。彼自身その少し前の部分では、ベギンに対する誘拐、乱暴が日常的であるとの訴えを紹介していたではなかったか。妊娠には望まない妊娠もある。妊娠したベギンを救う初期の規定は、暴力による妊娠のような事態を想定せざるを得ない治安状況を踏まえてのものでなかったかと私には思え、「寛容な」規定を削除することが、穏当なのか、さほど確信がもてなかった。

また、大きな問題ではないが、英文が生硬で読みにくい箇所が散見された。とりわけ冠詞の用法に誤用、乱用がみられ、しばしば文脈をとりにくくしている。

しかし、これらの点は、頭の片隅に置かれておくべきことであるとしても、本書の価値を大きく貶めるものではない。フラマン語によるベギン研究文献には、1918 年のフィリップセンの『ベギンホフ、起源・歴史・制度』、メンスの『低地地方のベギン・ベガルド運動の起源と意義』（1947 年）が代表的なものであるが、共に大著であり、邦訳も含め訳書がない。ベルギー出身者による自国文化の発信の意味合いを持つ本書からは、この地域の特殊性、(15 世紀に人口の 36% が都市に居住という驚異的な都市化率) や、地域民がベギンに対して、またベギンホフに対してもっている感情をこそ、注意深く読みとるべきであろう。

著者は結語部分で述べている。7 世紀にわたって、あらゆる年齢層、階層、知的願望をもつ単身女性を支える独特の環境を創り出し、維持し続けたことこそが、宗教生活・社会生活に対してベギンたちが果たした最大の貢献であると。同感である。異文化圏へのベギンホフの紹介が、

本書の最大の功績であり、中世の女性の生活史のみならず、教会史、低地地方の歴史に関心のある読者に一読をすすめる。